

2010年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、固定的な性別役割分業観にとらわれないジェンダーフリーの視点にたつて、男女共同参画社会の実現に寄与するための活動・研究をした者(団体)、あるいは活動・研究を計画している者(団体)を幅広く対象とします。

書類提出期間：2010年10月1日(金)～2010年10月26日(火) 17:00まで
 書類提出先：学生部学生厚生課奨学金係・新座キャンパス事務部学生課
 採用発表：11月25日(木) 学生部学生厚生課奨学金掲示板、新座キャンパス奨学金
 掲示板、ジェンダーフォーラム掲示板(10号館通路)に掲示予定
 授与式：11月下旬(予定)

(A) ジェンダーフォーラム『年報』掲載論文奨励金

対象：学部学生・大学院学生(個人・団体)
 支給額：優秀：10万円、佳作：5万円
 採用件数：2～4件
 選考方法：論文審査
 提出書類：①掲載論文奨励金申込書* ②論文(未発表のもの)
 備考：執筆にあたってはジェンダーフォーラム『年報』投稿規定に従うこと
 (『年報』投稿規定はジェンダーフォーラム事務局にあります)

(B) 活動・研究奨励金

対象：学部学生・大学院学生(個人・団体)
 支給額：総額20万円
 採用件数：1～2件
 選考方法：書類審査・面接
 提出書類：①活動・研究奨励金願書* ②奨学金使途を含む活動・研究計画書(A4用紙 3枚程度 書式自由)
 面接日時：2010年11月18日(木)、18:00～を予定。個々の面接時間はあらかじめ連絡する。
 面接会場：立教大学池袋キャンパス、ミッチェル館1F ジェンダーフォーラム
 備考：採用者(団体)は活動・研究の中間報告を翌年3月末に提出の上、最終的な報告書または論文を11月末に提出すること。提出の活動報告書または論文は、ジェンダーフォーラム『年報』に掲載する。

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(A)・(B)の申込書(願書)の利用目的】
 標記の申込書(願書)で取得した個人情報は、奨学金採用者(団体)の選考および発表のために利用する。採用者(団体)の論文・報告書等は『年報』に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子・WEB等に採用者名を記載することがある。以上に同意した上で、申込書(願書)を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、ジェンダーフォーラムのホームページ(<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/>)を参照すること。

※ 詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。(Tel : 03-3985-2307 E-mail : gender@rikkyo.ac.jp)

*申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生部学生厚生課、新座キャンパス事務部学生課、独立研究科事務室にあります。
 ホームページ上からもダウンロードできます。(http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/)



立教大学ジェンダーフォーラム

開室日：毎週火曜日～金曜日
 開室時間：10:00～16:00(火木金) 13:00～19:00(水)
 場所：立教大学池袋キャンパス ミッチェル館1階
 TEL&FAX：03-3985-2307
 E-mail：gender@rikkyo.ac.jp
 URL：http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/

詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPをご覧ください。

■案内図



Gemとは…光り輝く宝石。
 Gender Encounter in Mitchell
 を表します。「ミッチェル館での
 ジェンダーの出会い」の意です。

2010年度公開講演会(2010年7月9日(金))

構築されたメディアとメディアによる構築 —ジェンダー表象をめぐる—

講師：諸橋 泰樹 氏(フェリス女学院大学文学部教授)

今年度の公開講演会は、日本の女性学の体系をつくり、支えてきた草分けの研究者の一人である諸橋泰樹フェリス女学院大学教授をお迎えして開催した。講演会初の試みとして双方向型のワークショップが取り入れられ、他大生や社会人を含む参加者から活発な意見が交わされ、大変盛況であった。

前半は、講義形式により「メディアがどのように現実の出来事を報道しているか」を中心に図解を用いて説明され、メディアを通して私たちが認識する現実と本来の現実にはズレがあるということ、様々な思惑(時間・紙面の制約、演出、政治的介入など)により、実際の出来事がミニチュア化されたり、違う内容に置き換えられたり、報道されなかったりという「構築」がなされ、その中でジェンダーも構築されていることが解説された。

後半は、実際に構築されたメディアを私たちがどのように経験するかについて、テレビ番組をもとにワークショップ形式で進められた。六星占術師：細木数子氏がレギュラー出演していたバラエティー番組「ズバリ言うわよ!」の中の10分程のコーナー(2005年5月放映)を参加者が視聴し、シーンごとに映像技法・演出・登場人物についてワークシートに書き込みながら分析していくというもの。番組は「小学校低学年からの性教育は必要か」というテーマで性教育をバッシングする展開となっており、参加者の一人としてワークショップを経験した私は、数秒単位で切り替わる映像1コマ1コマに製作者の思惑が巧妙に隠されていることを実感した。

具体的な例を挙げると、小学校低学年から人形を使っての性教育が行われていることがデータの裏付けのないまま語られ、センセーショナルな問題であることを煽るような音楽・効果音、テロップなどがたたみかけるように流れていく。特に印象的であったのは、幾度となく画面脇に表示される映像効果であった。細木氏の意見に反する映像に対しては彼女の渋い表情が画面脇に小さく表示され、細木氏の発言シーンでは、会場の女性がしきりに頷く様子が小さく表示され、テレビ番組ではよく見られる技法であることを知りながらも、私は無意識に誘導されているような感覚になった。さらには性教育について真剣に語る場でありながら、会場の100人に男性がおらず、女性全員が白いブラウスで胸元に赤い薔薇をつけ、白服の細木氏の発言に頷く構図も独特な空間を作り出していた。

このように考えると、普段私たちが日常生活のなかで何気なく触れているメディア、とりわけ新聞やニュース番組と比べて気楽に見がちであるバラエティー番組において、私たちは番組の意図する方向へ安易に流されてはいないだろうか。現実にかかるあらゆる出来事が切り取られ構築され、その構築された現実をもとに私たちは現実を構築しているという事実を改めて認識したい。一方で、情報を発信する側に立った際に私たちはどこまで忠実に現実を伝えられているだろうか(現にこの講演会レポートを書いている私も、講演内容を私の「構築」のなかで紹介していることを自覚しつつある…)。メディアが語る現実には踊らされず、そして自らもその一人になってはいないかと振り返る意識をもつことをこれからの個人的な課題としたい。

村野 暁子(ジェンダーフォーラム運営委員/本学職員)

第51回ジェンダーセッション(2010年6月1日(火))

「リハビリテーションとジェンダー」

話題提供：八重田 淳 氏(筑波大学大学院准教授)

今回のセッションでは、まず、リハビリテーションについて説明があった。日本では病院での機能回復訓練をイメージすることが多い。障がいの領域においても手帳を取得していることが要件となっている。アメリカでのリハビリテーションは対象を限定しないという点が日本と大きく違うと言えよう。このような概念の違いは、日本において、リハビリテーションのもつ可能性を減少させてしまっていると思われる。また、専門職から与えられるものとしての印象も強いため、当事者の視点からリハビリテーションが語られることも少ない。

アメリカでは、リハビリテーションは市民権運動などで主張され、それが法律になり社会を変えていった。そのため、リハビリテーションを受ける人たちがリーダーであり、リハビリテーションは自分であるものと主張されていた。このように、アメリカではリハビリテーションの対象が徐々に拡大された。そこで、日本でも概念としてのリハビリテーションを再構築していく必要があるという今回のセッションにおける問題意識の共有は大変に有意義なものであった。

その後、障がいのある女性の就業に焦点を当てて発表があった。職業リハビリテーションとは、働くことを通してQOL*を向上していくことを目的としている。しかし、この就業について、多くの問題が発生しているという。アメリカの先行研究においては、障がいのある女性の就業率は44.2%であるという(障がいのない女性は75.5%)。また、障がいの有無にかかわらず、男女比は、就業率・収入ともに女性の方が低いという報告がなされた。

就業阻害要素として職業訓練の職種の狭さや職リハの評価基準の低さなど障がい特有の問題に加え、性差別的な労働市場、社会が求める達成基準の低さ、家庭における性的役割分担などジェンダーによる問題も生じている。このように多重な困難が障がいのある女性の就業に生じている。

もう一つの要素として、メンターやロールモデルの不在が挙げられていた。今後は、障がいをもって活躍する女性のロールモデルを広く紹介していくことも必要であろう。また、伝統にとらわれない職種のチャレンジをしていくことの重要性が示された。障がいやジェンダーに関わらず、魅力的なロールモデルから学ぶ機会を作ることが望まれる。

これら2つの問題について重要なのは、「障がいたから」や「女性だから」という視点でみるのではなく、人として、魅力があるということが重要だと意見が述べられた。そして、ポジティブなセクシャルイメージを持つことも重要で、それ自体が自尊心・自信の復活になっていくと話されていた。さらには、社会が「障がい者」としての役割を担わせているという現象が生じているということに私たちが気づくことも重要である。今回のセッションを終えて、改めて「障がいに関係なく、素敵な人は素敵」という価値観を大切にしていきたいと思った。

*QOL：クオリティ・オブ・ライフ

酒本 知美(本学兼任講師)

ジェンダー情報発信と立教大学ジェンダーフォーラムホームページ

国内には様々なジェンダー研究機関や組織が存在します。政府系機関、自治体、NGO…今回はその中から大学に属するジェンダー研究所や組織を選択し、ホームページでの発信情報の内容やその手法を確認してみました。本学ジェンダーフォーラムのホームページと比較しつつ、以下にその一部をご紹介します。

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター
<http://www.igs.ocha.ac.jp/>

「ジェンダーに関する総合的・国際的な研究を行う」ことを設立目的としていることもあり、「海外の大学における女性学・ジェンダー研究専攻(地域毎)」「海外NGO」「国連/開発援助機関」といった海外組織のリンクの充実ぶりが目立つ。

国際基督教大学ジェンダー研究センター
<http://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

ニュースレターやジャーナル等のアーカイブが創刊号からPDF化され閲覧可能。また、記事一つ一つが、その内容から複数にカテゴリズされた上で複数のリンクからたどり着ける、という情報提示方法を採用。更に特筆すべきは、英語サイト側で、コンテンツレベルまでほぼそのまま英訳され提供されている点。

…他にも研究所の蔵書検索が可能な愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所 (<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/>)等、独自の情報提供を行っている組織が見受けられました。

組織の沿革や体系、また設立目的の違いもあり、一概に同一視点から比較すべきではないですが、やはり工夫された手法で高いレベルの情報が発信されるこれらのようなホームページの存在を確認して、本学ジェンダーフォーラムのホームページもまだまだ発展・改善の余地があることに気づかされます。しかし逆にライブ感ある「イベント・講演会の開催レポート」の充実や、テキスト版の提供(これは大学全体での仕組みですが)等、本学ジェンダーフォーラムホームページのアドバンテージを発見できたことも収穫となりました。と同時に、他大学からのリンクに「立教大学ジェンダーフォーラム」の名前を見つける度、嬉しい気持ちがあがる反面、体系だったジェンダー情報を継続的に提供する組織の一端を担っていることへの責任と重要性を痛感したのです。

原 修(ジェンダーフォーラム運営委員/本学職員)

「所長就任にあたって」

新田 啓子(ジェンダーフォーラム所長/本学文学部教授)

本年度4月1日に、ジェンダーフォーラム所長に就任致しました。立教大学へ着任してからまだ日の浅い私がこうした重責を拝命致したのは、個人的に、青天の霹靂と呼んで余りあるめぐり合わせでありました。しかし一方、昨年度末にご退職なされた前任者・近藤弘先生は、4期8年間もの長い間お務め下さってきたわけですから、実際はこのフォーラム自体が、「代替わり」という事態に対し、私と同様、不慣れであるとも言えるのではないのでしょうか。

組織というものは、そこに責任をもつ人間が入れ替わる際、その役割や機能を再点検する機会を得るものと思います。するとジェンダーフォーラムは、意外と自己の働きを自覚的に省みたり、他者に説明したりという活動からは、遠ざかってきたのかも知れません。

もちろんそうした必要がなかったことは、平穩を意味していたに違いないのですが、「ジェンダー」という概念、あるいは社会批判の切り口が承認される道のりは、当然厳しい逆風に満ちていました。ごく最近にもあったバックラッシュという風潮もその一つです。私が所長としてなすべきことは、まず、このような広い社会的文脈における厳しさにも配慮しつつ、ジェンダーフォーラムの今日的使命と存在理由を再考し、それを踏まえた活動を推進することと考えております。

ジェンダーフォーラムは、いまでは珍しくなくなった大学におけるジェンダー公正推進組織にあって、極めて稀有な存在です。その設立は1998年、男女共同参画社会基本法制定の1年前でした。閉館される女子寮・ミッチェル館に代わり、女子学生の自己研鑽を触発する場として、女性職員が中心となって構想したのがこのフォーラムです。それから12年、ジェンダーという概念は、男性性を省察するための視点や、男女を超えた性自認、性指向をめぐるパラダイムとしても発達してきました。実際、このような問題に対する知識を求め、フォーラムに集う学生は年々増加しています。

そこで早速今年度より、こうしたジェンダー概念の展開に呼応した研究・教育の充実を、フォーラムの役割に接合するための活動が始動致しました。年度前期には、『年報』の研究発表媒体としての機能をより充実するため、同誌のISSN取得および、国立情報学研究所への登録を行いました。一方で後期には、ジェンダーセッションの枠の中で、学生・教員・職員が、性差や性自認について討議する合同ワークショップが開催されます。

こうした新たな試みは、運営委員の積極的な提案と熱心なコミットメントがあってこそ、実現しつつあるものです。事務局職員や運営委員が本学のジェンダー環境向上のために払う1つ1つの努力や成果が、公務として広く認知されるための働きかけも重要です。これは、フォーラム機能の客観化に連動した、私自身の大切な任務と自任しております。微力ながら、精一杯務めたいと存じます。何卒よろしくお願い致します。

「行動規範としてのジェンダー」

豊田 由貴夫(ジェンダーフォーラム副所長/本学観光学部教授)

私がジェンダーという問題に関わるようになったのは、まず大学の教育における関心からであった。私の専門は文化人類学であり、我々の日常生活における文化の重要性を認識してもらうことを、教育の主たる目標としている。男の仕事、女の仕事という性別役割や、男らしさ、女らしさという性別規範が社会によって異なり、生物学的な性と必然的な関係がない事例があるというジェンダーの考え方は、我々の日常における文化の重要性を理解してもらうには、きわめて適切な事例を提供してくれる。

文化人類学の概論の授業ではジェンダーの説明に1回を充て、ゼミではジェンダーに関わる教材を1年に2、3本使用している。ジェンダーという概念を理解してもらうことで、我々の身の回りの性別役割や性別規範の問題を、生物学的な性と照らし合わせて考えてもらっている。

性別役割や性別規範が社会によって異なるというのは、それらが社会によって作られたものであるということになる。このことを前提として、2つの対立する考え方が生じる。一方で、作られたものであるからにはその社会の条件に合わせているはずで、したがってそれは社会にとって適切であるという考え方がある。他方、それは社会によって作られたものであるからには、社会の一部だけの都合に合わせた可能性があるという考え方もできる。このような、ジェンダーに関するきわめて基本的なことをゼミ生の人たちに考えてもらい、議論をするというのを毎年行ってきた。

今年度からジェンダーフォーラムの副所長を拝命したのだが、しかし、私が以上のようなジェンダーの考え方を十分理解し、自分自身がそれに沿った行動をいつも実践しているかというと、決してそうではない。私はしばしば、ジェンダーの考え方に合わない、女性蔑視につながるような冗談を言って家族から注意される場合があるし、ジェンダーの考え方に照らし合わせて適切な行動をとっていなかったと、後で反省をすることがよくある。

ただ私が注意しているのは、自分が何か発言や行動をする時、はたしてそれがジェンダーの考え方に照らして適切かそうでないかを、絶えず考えるように努めていることである。私にとってジェンダーという考え方は、ともしれば不当な発言や不適切な行動をしてしまう自分に対して、自分を律するための行動規範という性格を持っている。

私がジェンダーフォーラムの副所長という任務を今回引き受けたのも、自分がそれにふさわしくないということを十分知りながら、その自分を律するために、ジェンダーという考え方を強く意識するという目的があったからであり、それを多くの人たちと共有したかったからである。